PART2　例題／練習問題解説

〔例題二〕次の傍線部の文法的意味として、最も適当なものを後の選択肢の中から選べ。

① いかなれば四条大納言のはめでたく、兼久がはわろかるべきぞ。
② いかなる人の御馬ぞ。
③ 惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、馬の頭なるおきな仕うまつれり。
④ 月のおもしろかりける夜、みそかに御息所たちの御曹司どもを見歩かせたまひけり。
⑤ 夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、…

ア 主格　イ 連体格　ウ 同格　エ 準体格　オ 連用格

①＝　②＝　③＝　④＝　⑤＝

問九 傍線部と文法的意味が同じものを、次の中から選べ。

いみじう若うをかしげなる男の、烏帽子・直衣なるが、物も覚えず泣き惑ふさま、…

イ 頭(かしら)白き女の水汲めるなむ、前よりあやしきやうなる家にいりける
ロ 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
ハ そこらの人の謗り、恨みをも、はばからせ給はず

問十　傍線部の「の」の用法を、次の中からそれぞれ選べ（同じ記号を何度用いてもよい）。

①　怪(け)と人の申すことどもの、…
②　前(さき)の一条院の御即位の日、…
③　髪つきたるものの頭の、血うちつきたるを見つけたりける、あさましく、…
④　かばかりのことを隠すべきかとて、…

ア　主格　　イ　連体格　　ウ　同格　　エ　準体格　　オ　連用格

①＝　　②＝　　③＝　　④＝

第14講　PART2　確認問題

① 傍線部の文法的意味の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選べ。

1　昨日の白紙思ひ出でてにやあらむ、かく言ふめり。
2　昨日のは、いと古めかしきここちすれば聞こえず。
3　秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへさだめぬ我ぞかなしき
4　わび人のわけて立ち寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり
5　玉光り輝きたる男の、いとをかしげなるを生みたまへり。

ア	1　同格	2　準体格	3　主格	4　連体格	5　連用格
イ	1　連体格	2　準体格	3　連用格	4　主格	5　同格
ウ	1　準体格	2　連用格	3　主格	4　連体格	5　同格
エ	1　連体格	2　連用格	3　主格	4　同格	5　準体格

②　傍線部と文法的意味が同じものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

若き人々、悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはんことをそそのかしきこゆれど、…

ア　月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、…
イ　鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる涙かな
ウ　かくいまいましき身の添ひたてまつらむもいと人聞きうかるべし、…
エ　心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。

③　傍線部の「の」の用法の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選べ。

1　もみじ葉の流れてとまる水門には紅深き波や立つらむ
2　黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる出で来てうち招く。
3　龍田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ
4　「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、…

ア　1　主格　　2　同格　　3　主格　　4　連体格
イ　1　同格　　2　同格　　3　準体格　　4　連用格
ウ　1　主格　　2　連用格　　3　同格　　4　連用格
エ　1　準体格　　2　主格　　3　準体格　　4　連体格

④　傍線部の用法が他と異なるものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

道にて、くらもちの皇子、血［ア］の流るるまで打ぜさせたまふ。…かくて、この皇子は、「一生［イ］の恥、これに過ぐるはあらじ。…天下の人［ウ］の、見思はむこと［エ］のはづかしきこと。」とのたまひて、…

⑤　傍線部の用法が他と異なるものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

中納言石上麿足［1］の、家に使はるる男ども［2］のもとに、「燕［3］の、巣くひたらば告げよ。」とのたまふを、うけたまはりて、「何の用にかあらむ。」と申す。答へてのたまふやう、「燕［4］の持たる子安貝を取らむ料なり。」とのたまふ。

ア　主格　　イ　連体格　　ウ　同格　　エ　準体格　　オ　連用格

〈Memo〉

第14講　ＰＡＲＴ２　解答

〔例題二〕 ①エ　②イ　③オ　④ア　⑤ウ

問九 イ

問十 ①ア　②イ　③ウ　④イ

第14講　PART2　確認問題　解答

〔解説〕

① 1は「昨日の」が下の「白紙」という体言を修飾しているので、連体格。2は「の」の下に係助詞の「は」があることから、「の」は「～のもの」を表す準体格とわかる。3は和歌中にあり、「～のように」と訳せるので連用格。4は下に「立ち寄る」と用言があり、「わび人（である自分が）とりわけ立ち寄る木」と訳せるので主格。5は下に「をかしげなる」と連体形があり、この下に「の」の前にある「男」を入れると「玉のように光り輝いている男の子で、非常にかわいらしい男の子」と訳せる。したがって、同格である。よって、イが正解。

② 「上の」は下にある「御ありさま」という体言を修飾している。したがって傍線部は連体格。アは「の」の下に「澄みわたれる」と連体形があることに着目する。「入り方」と「澄みわたれる」の下に「ころ」を入れると「月は沈もうとするころで、空は清く澄み渡っているころに」と訳せるので、同格。イは和歌中にあり、「鈴虫のように、声の限りを尽くして泣いても…」と訳せるので、連用格。ウは「このように忌みはばかられる身（の自分）が、おそばに付き申し上げるのも…」と訳せるので、主格。エは、「心にくきかぎりの」が下の「女房」という体言を修飾しているので、連体格。よって、エが正解。

③ 1の「もみじ葉の流れてとまる…」は「もみじの葉が流れて止まる…」、3の「手向くる神のあればこそ…」は「お供えをする神がいるので…」という意味になるので、どちらも主格の「の」である。2は「の」の下が「をかしげなる」と連体形になっている。この下に「童」が修飾されていると考えると、同格の「の」であるとわかる。4は、「花の」が下の「契り」という体言を修飾している。したがって連体格の「の」である。よって、アが正解。

④ アは「血が流れるまで…」、ウ・エは「世間の人が（自分を）見て思うだろうことが恥ずかしい」と訳せるので、主格の「の」

である。イは、「一生の」が下の「恥」という体言を修飾しているので連体格の「の」である。よって、イが正解。

⑤　1・3・4の「の」はいずれも主格の「の」で「〜が」と訳せる。２は「男どもの」が下の「もと」という体言を修飾しているので、連体格の「の」である。よって、イが正解。

〔解答〕

①　イ　②　エ　③　ア　④　イ　⑤　イ